群馬詩人クラブ
会報
No. 298

編集／群馬詩人クラブ幹事会
代表／磯貝優子
発行／群馬詩人クラブ事務局
〒370-3504
北群馬郡榛東村広馬場1067-2
現代詩資料館「榛名まほろば」内
印刷　三協印刷
振替番号　00160-4-708314　中澤睦士

平成28年度総会と
第29回 秋の詩祭 開催

開催日：平成28年11月23日(水・祝)
会　場：前橋テルサ９階　赤城の間

主な記事

●会計報告書・予算書……2
●詩祭講師・江尻 潔氏……3
「名辞以前の世界へ
画家の詩と詩人の絵をめぐって」
●詩集評……6
樋口武二『拾遺譚』　真鍋苑子
田口三舩『能泉寺ヶ原』川島　完
田村雅之『碓氷』　関口将夫
原田道子『かわゆげなるもの』
篠崎道子
●現代詩ライブ　報告
上林忠夫……9
●インフォメーション……10
●受贈詩誌御礼／編集後記……10

◆日程◆

受付　午後一時三〇分より

第一部　総会（二時～二時三〇分）

議長選出
代表幹事挨拶
1号議案　平成二十八年度事業報告
2号議案　平成二十八年度会計報告
同監査報告
質疑応答
3号議案　平成二十九年度事業計画案
4号議案　平成二十九年度予算案
質疑応答

第二部　秋の詩祭（二時四〇分～四時）

演題「名辞以前の世界へ
画家の詩と詩人の絵をめぐって」

講師　江尻　潔　氏

◇講師紹介

江尻 潔（えじり・きよし）氏
一九六五年七月七日　前橋市に生まれる。
群馬詩人クラブ、詩誌「東国」会員
足利市立美術館学芸員
・展覧会「画家の詩、詩人の絵」（足利市立美術館・四月九日～六月十二日）の開催および同展覧会の公式図録兼書籍の刊行において、企画・監修に携わる。
著書　詩集『逆木』　漉林書房
詩集『るゆいつわ』　思潮社
詩集『虚光集（ひのみかげふみ）』　思潮社
現在、高崎市在住。

第三部　懇親会（四時一〇分～）

会場　前橋テルサ1階「オルヴィエターナ」
会費　四〇〇〇円

★当日『群馬年刊詩集第三十九集』を配布します。
★この会報は総会の資料として使用しますので、当日ご持参ください。
★受付にて会費納入を受け付けます。年会費は三千円です。

群馬詩人クラブ　平成28年度会計報告書・平成29年度会計予算書(案)

平成28年度会計報告書
(平成27年10月7日～平成28年10月6日)

●収　入　556,129　(単位:円)

繰越金	249,129	
会費収入	267,000	
日本現代詩人会	40,000	
雑収入	0	
計	556,129	

●支　出　346,869　(単位:円)

印刷費	139,629	会報294号～297号、名簿
通信費	78,938	会報送料、 封筒、宛名ラベルほか
秋の詩祭	40,000	講師謝礼ほか
会議費	30,000	幹事活動費(3,000円)×10人
年刊詩集補助	0	
現代詩ライブ	24,288	往復ハガキ、ちらしほか
現代詩作品展	0	
総会関係費	34,014	往復ハガキ、テルサ会場費ほか
弔電	0	
諸雑費	0	
予備費	0	
計	346,869	

平成29年度会計予算書(案)
(平成28年10月7日～平成29年10月6日)

●収　入　542,260　(単位:円)

209,260	繰越金
333,000	3,000円×会員　111名
0	
0	
542,260	収入計

●支　出　542,260　(単位:円)

170,000	会報298号～302号、名簿
80,000	会報送料、 封筒、宛名ラベルほか
30,000	講師謝礼ほか
30,000	幹事活動費(3,000円)×10人
0	
0	
30,000	往復ハガキ、ちらしほか
35,000	往復ハガキ、テルサ会場費ほか
0	
10,000	
157,260	
542,260	支出計

収入合計 556,129円－支出合計 346,869円 ＝ 差引残高 209,260円
次年度繰越金　209,260円

詩祭講師

名辞以前の世界へ
画家の詩と詩人の絵をめぐって

江尻　潔

「画家の詩、詩人の絵」展を開催する五年前、「画家たちの二十歳の原点」という展覧会に企画の段階から参加しました。足利市立美術館を含め、四会場を巡回したこの展覧会は明治から平成までの54作家の二十歳前後作品を一堂に展示しました。二十歳という年齢で横断することにより時代を超えた画家たちの真摯な生きざまが見えてきました。その折、画家たちの言葉も一緒に集めました。瑞々しい言葉の数々に心を動かされましたが、多くの画家が詩を書いていることに改めて気付かされました。画家たちは心を尽くして自分の思いを詩に託しています。また、尾形亀之助など少なからぬ詩人たちが絵を手がけていることも気になりました。ここから詩と絵は深いところでつながっているのではないかという問いが生まれました。画家の詩と詩人の絵をともに展示したらどのようなことが見えてくるのか、そのような思いにより、企画しました。以下、気づいた点を記述します。

まず気づいたのは、絵に対応する詩、詩に対応する絵が、画家にも詩人にも見出しうるということです。特に古賀春江は、「解題詩」を作品に添え、意識的に絵と詩を対応させています。「野に出て山を見る。はるばるとして山を見る。胸に迫って「あゝ」といふ感嘆詞が出る。これが絵の場合の一点だ。これで十分だ。たとへこれ以上の語句が或る一つの詩歌にあつたとするも、この最初の「あゝ」まで煮詰めなければいけない。だから同じ「あゝ」である」と述べ「張り切つた形」が詩であり、絵だと言っています。特に水彩画は詩歌であると言明しています。古賀にとって詩と絵はともども「あゝ」という感嘆から出ています。出所はひとつなのです。また、三岸好太郎は「蝶と貝殻」を主題とした作品群を総称して「視覚詩」と呼びました。「絵画による詩」、「視覚化された詩」を目指しています。三岸は「詩集を熟読する事によつて、画因を得る場合が随分に多い」と語っています。詩は絵の源泉として機能しています。古賀も三岸も詩才に恵まれ詩と絵がともども双子のように生れ出ています。

詩と絵、双方の才能に恵まれた作家の代表格に村山槐多がいます。9歳の時、父から買い与えられた画材で絵を描きはじめ、中学時代には友人たちと回覧雑誌『強盗』を発行、絵画のみならず詩や小説に早熟な才能を発揮しました。感情の高まりを詩と絵に昇華し、それらは野生と知性を併せ持ち、異様な輝きを放っています。22歳と五か月という短い生涯は半ば伝説化され人々を魅了しましたが、多くの画家や詩人に影響をもたらしたのは言うまでもなく作品そのものであり、夭折者だけが持つ、あるいは、それゆえ夭折せざるを得なかった生き急ぐような燃焼度の高さは詩と絵に帯電し、今なお熱気を保っています。《尿する裸僧》は彼の代表作であり、「一本のガランスをつくせよ」と歌った槐多自身が描かれているようです。彼は絶えず死と隣り合わせに自分の意識を持っていきました。そのギリギリのところで見えてくるものに照準を合わせることにより緊張の度合いを高めています。まかり間違えれば転落する危険が隣り合わせにありました。そのような心情の吐露がむしろ詩のほうに多く見受けられます。「血が私の口から滴り／死神がくゝと笑ふ」という詩には死を目前にした哀切が鬼気を伴って迫ってきます。このような詩には《房州風景》が対応すると思われます。人気のない寂しい絵です。槐多は、自分を鼓舞したり、確認するために詩を綴っています。彼の詩には絵にはなりきれなかった、また絵にすることが憚れた画家の本音が披瀝されたものもあります。肩肘張らず、ふと出た言葉の素直さと初々しさが感じられます。

一方詩人の場合はどうでしょうか。詩人の中には絵を志していた人物が少なからずいます。木下杢太郎、佐藤春夫、西脇順三郎、岡崎清一郎は、はじめ画家を目指していました。木下は三宅克己に、佐藤は高村光太郎に、西脇は黒田清輝に、岡崎は太平洋画会研究所に学んでいます。

西脇の絵画作品《太陽(Ambarvalia)》(1950

年代）は、詩集『Ambarvalia』（1933）に所収の詩「太陽」に対応しています。大理石の石切り場、スモモの藪、ドルフィンを捉えて笑う少年、そして太陽、詩に出てくるものが絵に描かれています。注意すべきことは詩が先行していることです。若いころ西脇は日本語で詩作することに難渋し、英語やフランス語で詩を書いていました。萩原朔太郎の詩との出会いにより、母国語で詩作する可能性を見出しました。大正14年、自作のフランス語の詩を翻訳し、初めて日本語による詩を発表しました。一方、絵画作品は当初より東洋的な傾向が強いものでした。西脇は昭和11年より詩作から離れますが、この時期も絵の制作は継続されていました。戦後の絵画作品には晴れやかな地中海的風光の中に東洋的な要素が影のように沈殿しており、それが何とも言えない味わいをかもしています。このような印象は西脇の戦後の詩作品にも共通しており、両者が分かちがたいものであることを示しています。

西脇は戦前期の旧作を絵にすることでその奥にある東洋的気質を確認していると思われます。描くことにより戦前の詩と戦後の仕事は地続きのものとして認識されます。西脇の場合、絵が、東洋的なものを保つ働きを帯びて彼の生涯を通じて通奏低音のように流れていた感があります。

また、岡崎清一郎の詩「神神」の一節「小僕（ボク）はズドンと発射（ウ）つ。／野原の高い植物に狙いをつけて。／ああ神神は命中して落下（オチ）てくる。」は《鉄砲と鶏》によって先取りされています。絵のほうが詩よりも先に描かれています。岡崎は浮かんだイメージをまず絵によってつかみました。イメージを定着させるにあたり絵は有効に働くことが分かります。イメージはその後も持続し、詩として醸され結晶化されました。

絵は言葉と異なり色や形でイメージを投影できる直接性があります。その利点を詩作に援用していることが彼の制作からうかがわれます。

こうしてみると画家は詩を、詩人は絵を、さらなる制作に援用したり、確認のよすがとしていることが分かります。しかし、画家の詩や詩人の絵の中には単なる援用や確認とは思えないものがあることも事実です。絵の果てに言葉が、言葉の果てに絵が顕れ、画家は詩人を、詩人は画家を自身の内に見出します。これは言葉でしか、あるいは絵でしか表現できないものと彼らが出会った証でもあります。次に詩でしか、あるいは絵でしか表現し得ないものについて考えてみます。

まず、画家がどのようなときに詩を書かざるを得なかったのか見てみます。

画家が自然を対象とする場合、最大の師は自然そのものであり、言葉を失わなければその懐に入れません。言葉は自然との距離を保つはたらきがあるからです。一方、絵具はものの世界に属し、画家が求める色やかたちは自然との親密の度合いが強い。画家は言葉のない「もの」の領域に深く分け入っていきます。そこで画家はさらに自然に近づきその造形の秘密に迫り、自然に代わって創造したいという想いに駆られます。それは自然をまねぶ行為です。しかし、自然に近づけば近づくほど冥く深い裂け目が現れます。制御しきれぬ大きな存在に呑み込まれる畏れが生じます。そこではすべての名は失われ、画家自身の輪郭も保てなくなります。深淵に踏み込んだとき、たよりになるのが言葉です。言葉により対象を把握し、距離を保つのです。名のない状態、あるいは名ざすことができない状態のただなかで名が求められ、言葉が呼び出されます。このような言葉は畢竟、詩にならざるを得ません。なぜならばかつて一度も名をもたなかったものの名であるからです。ここに詩のもつ大きな役目が示されます。それは名のないものに名を与えその出現を促すはたらきです。名が与えられたことによりそれははじめて対象として認識されます。

画家は名のない混沌に巻き込まれる危険にさらされる一方、その豊かな世界に魅了されたことと思われます。このような状況下において紡がれた画家の詩には優れたものがあります。藤森静雄、田中恭吉の詩などはその例です。詩は彼らにとって自身を取り戻す護符や呪文のように機能するとともに、名づけようもない大いなるものに身をゆだねる心地よさと苦痛を披歴する手段となりました。また、

古賀春江の《サーカスの景》など、言葉のない、あるいは音のない一種凄みをもった世界が迫ってきたとき、観者は知らず知らずのうちに言葉を口にすることでしょう。これもまた、防御のしぐさに他なりません。

次に詩人が描かざるを得ない状況について考えてみます。詩にはまずリズムがありますが、言葉であるゆえに意味が付帯します。詩人は既存の意味からいかに離れるか試みます。遠く隔たった言葉同士を結びつけ、新たな意が発生するよう仕向けたり、極端な場合、独自の言葉を創出したりします。

中原中也は鋭い感覚と洞察で、既存の言葉からいかに乖離するか悪戦苦闘しました。中也は「芸術論覚え書」のなかで「芸術といふは名辞以前の世界の作業で」あると言いきります。「『これが手だ』と、『手』といふ名辞を口にする前に感じてゐる手、その手が深く感じられてゐればよい」と言っています。つまり「手」という名辞を発する以前に感じる手そのもの、そのような次元に芸術は属しそこからしか詩は生まれないと述べています。これは重要な発言です。つまり詩は名辞以前に属すると述べているからです。中也のいう名辞は名詞を、さらにはそれがもたらす概念と考えられますが、言葉そのものとも解釈できます。詩は言葉でありながら言葉以前の世界のものであるというのです。これをどのように理解すればよいでしょうか。ひとつ考えられるのは言葉には二種類あるということです。一般的に使われるコミュニケーションの道具としての言葉は名辞であると言えます。全体から部分を分割し、名ざし、相手に概念を伝えるはたらきをもつ日常の言葉です。中也はこのような言葉以前に別の言葉があったと考えたのではないでしょうか。すなわち詩の素材となる言葉が別に存在するのです。それは概念を提示することなく未分化なある種の実感をいだかせる言葉です。このような言葉は具体的な何かを名ざすわけではありません。「手」が「手」である実感をもたらす、「手」が「手」として分割される以前の全体性を取り戻す言葉、あえて言えば「手」を名のない状態に戻す言葉です。先ほど、かつて一度も名をもたぬものの名が詩だと述べましたが、ここでは詩は名のあるものを名のない状態に戻そうとしています。こうしてみると詩作とは、名のないものに名を与え、名のあるものを名のない状態に戻す作業だということが分かります。どちらも名辞以前の世界と深くつながっています。つまりそのものと出会った初発の発語に迫る作業なのです。しかし、名のない状態に戻す言葉は、はたして存在するのでしょうか。さらに考察してみます。

名辞以前の言葉とは、おそらく響きではないでしょうか。言葉は音であり、音はそれぞれ傾向があります。温かい音や澄んだ音、鋭い音や乾いた音等、性格をもっています。これら音により感情や、さらにはかたちまでも想起させることができるのではないでしょうか。いわば名辞のもととなる言葉です。このような音の性質は動物の鳴き声にも共通しています。私たちは鳥や獣の鳴き声が威嚇しているのか、仲間を呼んでいるのかある程度わかります。中也はいわばこの「根」に近い言葉によって詩を書けと言っているのではないでしょうか。それは言葉の野性を取り戻す行為でもあります。中也はそれをオノマトペによって克服していったと思われます。あるいは具体的な言葉にせず、「言葉なき歌」などにみられるように指示代名詞に留める場合もあります。さらには視覚的な表現（「曇天」の「黒い旗」など）によって提示しました。この、視覚的な表現への転換、ここに詩人が絵を描くきっかけがあると思われます。つまり絵は名辞以前のものを表現するにはうってつけなのです。具体的に形を描かずともそのものの実感を色彩や線で表現するのです。これは響きによる詩作よりも自在性が高いと思われます。

名辞以前を描いた詩人としてまど・みちおがいます。まどは51歳から54歳までのごく限られた時期に集中的に抽象画を描きました。混沌からやがて律動が生まれ出る画面は宇宙の始まりを想起させます。その後彼の詩は大きな変化をきたしました。詩の内容は絵と響きあっており、絵の制作は彼の詩作にとって欠くべからざるものであったことが分かります。

名辞以前を絵画と詩、双方で表現した詩人として山本陽子がいます。山本は意味以前の、

あるいは意味を越えた異様な詩を遺しました。日本語をもとに彼女独自の言語体系と造語が詩を構築しています。また、それらの詩群は構築であると同時に既存の言葉の崩壊でした。講演会では山本作品に絡めて自作についても少し述べたいと思います。

二〇一六年『群馬年刊詩集第三十九集』販売のご案内

群馬詩人クラブ刊行『群馬年刊詩集第三十九集』を次の要領で販売します。

内容

詩作品　六十六篇

追悼　「吉井栄一追悼」梁瀬和男

「宮下洋二の生き方 ―父としての二十年間―」宮下木花

表紙装画　北川美和子

発行　〒370-3504 北群馬郡榛東村広馬場1067-2 現代詩資料館「榛名まほろば」内 群馬詩人クラブ幹事会

印刷　三協印刷

頒布　二〇〇〇円　会員は一〇〇〇円

いずれも郵送費は別料金となります。

※問い合わせ及び購入希望は幹事会まで。

（☎〇二七九-五五-〇六六五）

詩集評

樋口武二詩集『拾遺譚　記憶の中のものたちが、』「夢」を詠む

眞鍋苑子

樋口さんは「夢」を描く。すべてのご詩集に触れたわけではないが、それでも何冊かの詩集に収められた作品群や、その中に綴られたご自身の言葉から、それを明らかに感じ取ることができる。失礼を承知で言えば、樋口さんは、夢に「憑かれている」といっても良いかもしれない。それでは果たして、「夢」とはなんなのか。そして、その疑問を突きつめれば突き詰めるほどにぶち当るもうひとつの疑問。では、「現実」とはなんなのか。樋口さんは、その両者についても問いかけを続けている。

最新詩集『拾遺譚　記憶のなかのものたちが、』は、序「アンドロイドは夢をみるのだろうか」によって幕をあけ、第1章「日常からの声」に呼びかけられるように第2章「ものがたりの森へと誘われ、」、第3章「ひとを捜して歩きまわって、」で幕を閉じる。「夢」への思索をあきることなく続けている樋口さんの姿勢を象徴するような章だてになっている。「夢」という現象は、人という生き物が、生命活動を維持するために必ずおこなわなければならない「眠り」という行為の中に時折あらわれる。それならば、「夢」をみることも、人にとって生きるためになくてはならない行為なのではないか。生まれてから一度も夢を見たことがないといった人に、自分はいまだかつて出逢ったことがないが、それも、そのような理由があるのであれば納得がゆく。これがもし真実であるならば、アンドロイドは、夢をみる「必要」がないのかもしれない。夢に対する科学的な研究は今もなお様々な形でおこなわれているとは思うが、樋口さんは、それを横目でとらえながらも、「詩作」という方法をとおして「夢」を見つめつづけている。考え始めればキリがない問いがこの世には数限りなく存在する。「夢」もそんな問いの一つだ。樋口さんにとって詩を書くということは、「夢」を哲学することなのだとも思う。でも、答えなどいらないのだ。「夢」という問いがわたしたちに与えてくれる際限のない「生命」や「人生」に対しての想い、それを見つめるために、繰り返される日常の中の規律にそった足並みをほんのひと時でも、不可解な、不愉快な、痛快な、時に思いっきり幸福な足どめを食らわせてくれる「夢」というものを、樋口さんは愛してやまないのだとも思う。

樋口さんの詩に触れていると、自分まで「夢」を愛しいものと思える。そしてこの詩集を読み終えて今、映画『ブレードランナー』や、黒澤明の『夢』を、ふたたび鑑賞したくなっている。樋口さんの「夢」は、決して終わらない。

田口三舩詩集『能泉寺ヶ原』を読む
詩観を貫く諧調と志節

川島　完

音楽でも数学でも、「美しい」と呼ばれるベースには、必ず諧調がある。建築もそうだ。もっとも不協和音を多用する現代音楽や、五次以上の方程式は代数学では解けない――という現実もある。田口詩を「美しい」という括り方で見ているわけではないが、一本貫く諧調だけは、本物である。

基盤上をバランスよく見極める頭脳、教育弱者に長く係わってきた身体性も、側面的にはあるだろう。が、それにしてもこう重心を低くし、安定感に裏打ちされた作品群を読むと、人はみな小さな幸福感に浸る。そこには鋭利な論調も、ソフトフォーカスにしてしまう技術があり、ぼやき口調を支える独特のフレーズの構成力もうかがえ、心憎い気さえする。

そんな思いのなかで詩集をみつめると、「アケビ」「能泉寺ヶ原」「夢は朧に陽は西に」「歩き方を見ればすぐ分かる」「もうこれっきり」「有り体に言えば」などが、その母岩を為しているように思える。時代や環境や人びとの濃淡を併せ持つ関係性が、手際よく調理され立ち上がって来る。

その上、多くの作品がさらりと書かれているのに、文系の温灰のなかにある親和性があり、しかも順なることも逆なることも受け止めて胸に収める、包容力豊かな詩姿にもなっている。

こんななかで、強いて好きな詩といえば「ヤブツバキ」になろうか。

そして
いつか帰らなければと胸に描いていた
ふるさとはそっと
記憶の向こうにおしやっておくがいい

人影のない里山で
音もなく
地の底に吸いこまれていった
ヤブツバキの花
いちりん
そのたましいは
燃えさかる中天の闇に
翅をひらいたまま溶けていった
蝶のたましいと
なぜか
姿かたちがそっくりなのだった

（全四連中の三、四連）

もはやすべてがニュートラルで、ここには田口三舩の詩を透しての、恒心と志節がしっかり映し出されている。

そのほかにも、厳然たる詩人の眼の「生まれてはじめての景色を見るように」や、微笑とペーソスの「吊り雛」や、不易流行を提示する「塞の神の立つ峠」や、冷徹な自己観察の「先様が断りさえしなければ」などの、自在で多様な詩に出会える。

田村雅之詩集『碓氷』

関口将夫

「碓氷」―うすい―と口をすぼめ語尾を下げると、幽かにことばが湿り気をもってくる。「碓氷」は万葉集にも「宇須比」とあるから、奈良時代前から使われていた地名だろう。「碓氷」は東征した日本武尊の幼名（小碓の命）から来たとも「山の東に向いて朝日の昇るよう、ほのかにうつろうて美しければ…」から来ているとも言われているようだ。（群馬の地名・森田秀策）碓氷峠は霧の中から現れると言えるほどに霧が発生する。山霧は匂いがしてから現れる。まるで生き物のようである。碓氷峠で私は何度もその霧を吸った記憶がある。霧のあと景色がうつろい美しいのだ。

詩集『碓氷』を手にした時、あのうつろいの美しさが漂う装幀に驚いた。トライアングル図の下層は霧に包まれているように思えた。

「碓氷へ」の文中に／単にわたしにとっては／懐かしい故郷の地名に過ぎないのだ／と反語として言っているが、「わたし」と言う問は、そのまま故郷にそそがれる問と同質のものであり、「わたし」と直結している。田村雅之にとって十二冊目のこの詩集は、その意味でも「わたし」を「故郷」を俯瞰した詩集だと思った。そしてまた「故郷」とは一人称で語れる「場所」なのかもしれないと思った。

「声七変化」は栞で佐々木幹郎氏が深く書いているので、私は「寒蛩」に触れたい。

森の奥底に息づく
ふしぎな生きもの
何か物言いたげに
羊歯の葉蔭にひそむ妖精に似た
狐色をした容量のかるい口髭のゆらぎこそ
たしかにあの世からの
使者なのだ

もうじき死ぬであろう、秋の終りに現われて啼くコオロギを、あの世からの使者だと言うのだ。そしてすだく虫の音はやがて、あの世とこの世の境にある扉を開ける軋みの音に変わる。

しだい次第にその音量は
反響に反響を重ね
まるで宙全体が鐘で覆われ
割れんばかりの轟音に変化するのだ

一匹の虫も、花も人も死をまたぎ、あの世への扉に触れる一瞬の軋み。実体から空虚へと移行するその震えだと言うのだ。

田村詩には語りのようなリズムがあり、語音を大切にしている。しかし、いつも平易なことばで詩作をしている私などは、語彙のつまづきが多く、時々リズムを乱して読まなければならなかった。「睥睨」「慷慨」「細蟹」「蹌踉」「鳥総立」「須臾」などなど多くあった。「碓氷」という地名の上を、田村詩の地平を、一羽の鷹のように「旋回」できたことをうれしく思っている。

原田道子詩集『かわゆげなるもの』

一茎の花にならん

篠崎道子

原田さんは、語感をとても大切にする詩人である。語感とは、発語されるときの音色というか、音声の感じである。

だから原田さんによって選び抜かれてキーワードとなる語は、その語源にまで遡られ、原初の発声音が毀されないよう気遣われている。読者はその語の前でふと立ち止まり、おおどかな語感に濯がれ、やがて頁を繰るうちに、象徴性の高い意味合いを含んだ語であると、気づかされるのである。

冒頭の詩「種のシャッフル」の出だしを、例にとってみよう。

ふりそそぐ映像が乱れる西の子宮／謎めくイクサは種のシャッフルだ。と誰がいったか／〈海岸線〉にさばしる／〈ゆき〉のイクサが礫になるまえに／

「子宮」を「こみや」と読ませる。単に生物の生殖器官に止まらず、母なる地球をも意味するのでは？「イクサ」は、太古の礫や槍によるものから、現代の核兵器による戦争までを包含するのでは？「ゆき」を「雪」としないのは、ゆきゆきてかへるところなし、の人類の行方を暗示しているのでは？等と感じ取れるのである。

さらに原田さんの詩には、発語以前の擬声語・擬態語が鏤められているので、元始の巫女が舞踏しつつ唱えた呪句・呪文の韻律と音響の世界に、いつしか取り籠められてしまう。逆に見れば、その世界を出現させるために、必然的に語感を大切にする姿勢が貫かれているのだろう。

さて読み進むうちに、人類という形あるものになるだろう未分化な微粒子（ぼくらであり、かわゆげなるものであり、ひいては地球上の生物すべて）が、水辺で身じろぎしながら囁き合っている感触が、肌に伝わってくる。ぼくらは、代々受け継がれた種の遺伝子を、確実に繋いでゆけるのか、異なる種に変えられて、銀河系の外へ跳ね出されるのではないか、等とゆらぎ続けるのである。

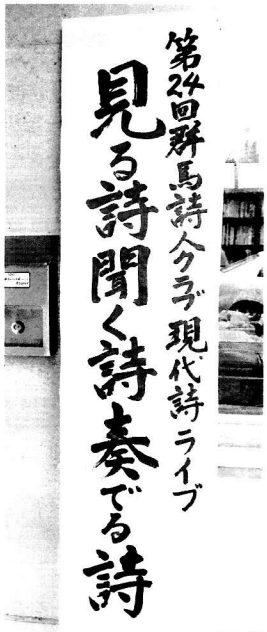
しかし詩集の後半では、地球の崩壊、人類の絶滅という一般的な暗黒の近未来図に、原田さんは柔らかに拮抗してみせる。前半の不分明なゆらぎの薄闇の中に垣間見えていた「ゆき」に、導かれるようにして、「月」や「花」の有り様に目を向けてゆく。

「春の栞」の結び近くに、触れてみよう。

〈みず〉と〈つち〉がある／もえさかる天地のただなかに栞をたどって還れるのは／（略）死デハナイ身ノ丈ノシルシに／ひょんと咲いてみせる　たんぽぽの／ひょんと聲をあげようとするたしかな春意／

そして「たった／一度でいい／花にのみならんと」と、詩人原田さんは願うのである。

第24回
群馬詩人クラブ現代詩ライブ
「見る詩、聞く詩、奏でる詩」



2016年
7月9日(土)

現代詩ライブ

場所
現代詩資料館&喫茶
「榛名まほろば」
朗読会　14時～16時
懇親会　16時30分～

参加者（26名）

井上英明・上林忠夫
小嶋明子・福田　誠
松本茂晴・金井裕美子
磯貝優子・井上敬二
狩野　務・金井治子
斉藤守弘・佐伯　圭
三枝　治・提箸　宏
神保武子・須田芳枝
関根由美子・田口三舩
堤　美代・富沢　智
中澤睦士・堀江泰壽
荒井哲夫・寺内　拓
浅見恵子・立川朝志

現代詩ライブ朗読会に参加して

上林忠夫

初めての参加で、何かを発見したいという期待と駄目な自分が見えてしまうのではないかという不安がありました。会場の榛名まほろばを訪れるのも初めてのことでした。受け付けで出番のくじをひくと、私は八番目でした。一二から一三客の席の塊が二つ用意されていました。私は南窓の近くの端を自由席に選び、周囲を見渡しました。どなたかが、アイスコーヒーを私の前に置いて微笑んでくれました。小さなライブで音楽を聴くのが好きな私は、居心地のよい会場空間に身を置いていました。

持ち時間がひとり五分間。自作を読まれる方、他者の詩を読まれる方、ベースやギターをバックに読まれる方、歌を歌う方など人それぞれで、それが実にライブそのものでした。

朗読の前の自己紹介も各自独特で、その方の作品のような趣でした。吉増剛造だったら、どんなパフォーマンスをここで演じるのだろうか、と想像していました。私は、まだ完成していない三篇を朗読しました。脚の震えを感じながらも、壁にぶつかって耳に入る自分の声が心地よく、詩は読むものなんだ、と感じる自分がいました。

朗読会が終わると、心地よい高揚感のまま親睦会が始まりました。朗読会の楽しさを充分味わった満足感が、参加者の方々の顔に笑顔としてあらわれ、話が弾んでいました。

こんな楽しい時間を支えてくれたのが、榛名まほろば、富沢夫妻のおもてなしでした。

美味しかった手料理をもう一度食べたいものです。

新入会員紹介

■荒井哲夫
〒379-2304
太田市大原町344

インフォメーション

萩原朔太郎生誕130年記念
前橋文学館特別企画展
パノラマ ジオラマ グロテスク
―江戸川乱歩と萩原朔太郎

会　期　10月1日(土)～12月18日(日)
会　場　2階展示室
観覧料　一般300円・高校生以下無料

記念イベント
〔対談〕「猟奇なふたりの病気な話」
乱歩孫　平井憲太郎
朔太郎孫・館長　萩原朔美
日　時　12月18日（日）午後2時～
会　場　3階ホール
●11月19日（土）9時より電話で受付開始
●先着100人　参加費無料
お問合せ　萩原朔太郎記念・水と緑と詩のまち
前橋文学館
電話　〇二七-二三五-八〇一一

第46回萩原朔太郎研究会　研究例会

日　時　11月20日（日）
13時30分～16時
場　所　前橋文学館3階ホール
入　場　無料
講　演　萩原朔太郎研究と前橋問題
三浦雅士（文芸評論家）
研究発表　萩原朔太郎の愛した〈不思議〉
栗原飛宇馬（文学研究者）
お問合せ　萩原朔太郎研究会
（萩原朔太郎記念・水と緑と詩のまち
前橋文学館内）
電話　〇二七-二三五-八〇一一

受贈詩誌御礼

＊御恵贈感謝します。

『島根年刊詩集』44集　島根県詩人連合
『三重県詩集』24　三重県詩人クラブ
『大分県詩集』2015年版　大分県詩人協会
『いしかわ詩人』10集　石川詩人会
『北海道詩集』2016年版　北海道詩人協会
詩界通信・日本詩人クラブ広報　76
埼玉詩人会会報　79・80
中四国詩人会ニューズレター　39・40
関西詩人協会会報　81・82
島根県詩人連合会報　80
岡山件詩人協会だより　17・18
福井県詩人懇話会会報　91・92
福岡県詩人会会報　164・165
中日詩人会会報　186・187
秋田県現代詩人協会会報　54
岐阜県詩人会会報　6・7
兵庫県現代詩協会会報　39
宮城県詩人会会報　23
大分県詩人協会会報　145・146
千葉県詩人クラブ会報　234
福島県現代詩人会会報　113
「いしかわ詩人」　41・42　石川詩人会報
「北海道詩人」　141　北海道詩人協会
「いちご通信」　14・15　大分県詩人連盟
「静岡県詩人」　128　静岡県詩人会
『風のうた』藤田三四郎詩文集　田口三船
SUKANPO　21　小野啓子
杏　2号
詩と童話「タラの木」24　タラの木文学界
（十月七日現在　敬称略）

編集後記

今年のノーベル賞（生理・医学賞）受賞が決まった大隅良典・東工大栄誉教授の「オートファジー（自食作用）」がおもしろい。細胞内で不要になったタンパク質を、捨て去るのでなく、アミノ酸に分解して再利用する。自分の体の細胞の中で究極のリサイクルシステムが働いていると思うと、何だかうれしい。

11月23日は総会・秋の詩祭。今年は会場も広くなりました。皆様、ぜひご参会ください。

（佐伯圭）